

東京女子高等師範學校  
園種協會

# 幼 兒 の 散 育

主 幹

堀 七 藏

第 二 十 六 卷 一 月 號 第 一 號

御 令 旨

大 臣 祝 辭 校 長 式 辭

東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 開 校 五 十 年 記 念 式

だ よ り

本 邦 幼 稚 園 教 育 創 始 滿 五 十 年

內 親 王 殿 下 御 誕 生

皇 孫 御 養 育 の 御 革 新

き び が ら 細 工 ( 其 三 )

田 舍 の 幼 兒 を 集 め て

育 兒 叢 談 ( 七 )

幼 兒 を 入 園 さ せ て

子 供 の 世 界

智 慧 く ら べ

長 編 兼 ち ゃ ん

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

堀 生

帝國美術院會員  
東京美術學校教授

岡田三郎助先生・丹羽禮介先生 共著

# 新學校 刊 家庭

# 教育略畫集と其描き方

菊判全一冊  
美裝石版色  
刷八葉作畫  
千餘  
定價  
三圓八十錢  
送料  
金十八錢

寫真ごスケ  
ツチを應用  
した正しい  
略畫の描方

兒童の教育は繪畫教育に俟つ所が多い、然もそれは略畫が簡明で最もその價値に富むものであると信ず、蓋し本書公刊の所以である。先づ線、色彩、人體、風景、花と鳥獸等の作畫千百餘を國定教科書中の圖畫、修身、國語、理科、地理に取材して、兒童の學校生活と聯絡を執り其作畫一々に就て曲線、直線の使ひ方、原色、補色、間色、鹽梅方法等の描方萬般に涉り兒童教育を基礎として説明すると共に寫真、スケツチを挿入して其事實を明示して居る、本書の活用によつて全科に涉り具體直觀よく兒童を指導し重ねて圖畫教育の効果を擧げ得る事を確く信ず。

岡田三郎助共  
丹羽禮介著

三版  
學校 家庭 教育圖案畫 集と其描き方

藥判一冊洋綴  
定價參圓八拾錢  
送料十八錢

本書は一般圖案特に教育的圖案に關する構圖の概念と其描法作例數百を明示して何人でも容易にこの道に入る事の出來る近來の大力作である。

黑田芳生共  
上甲二郎著

兒童の描いた鑑賞畫集と其描き方

大判手引類用  
定價貳圓五拾錢

一々學年相應の説明を附すると共に、鑑賞の方法を指示した。又別冊と右畫集の教師用畫を之に附した。

帝國美術院會員  
東京美術學校教授  
岡田三郎助先生  
丹羽禮介先生 共著

五學校 家庭

# クレヨン畫集と其描き方

定價金參圓八拾錢 送料金拾八錢

線より畫になる  
迄の順序と其模  
範畫集!!

眼で正確なるものを視、頭腦で之を會得し、さうして指導者の教育に俟つ、蓋し他に途でない腕に依つて此目的を達せしめようとする事はどうして、順序と練習を敘し、内容の作畫、人物、鳥獸、蟲魚、風景、花卉、蔬菜、器具等數百畫並、一本の線より段々と繪となる迄の順序を描き方を示し、加之岡田丹羽兩畫伯の模範畫數百を以てクレヨン畫の眞髓を明かにしたる近來の大作である。學校教育者は勿論各家庭の必備を推奨す。

發行所 東京市牛車地 中區 文館書店 電話 替 三三三 三三三 三三三 三五七 番番

謹んで新年を祝賀いたします。

本邦に於ける幼稚園教育創始以來  
第五十回の新年を迎へたることを  
祝し併せて幼稚園教育の益々發展  
することを祈ります。

日本幼稚園協會役員一同



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

謹んで新年の祝詞を申し上げます

大正十五年一月元旦

日本幼稚園協會長

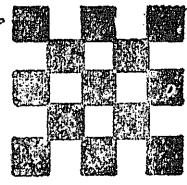
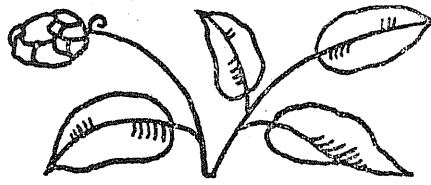
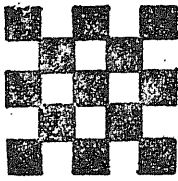
主幹

茨木清次郎  
堀七藏

賛助員

安井哲子	三田谷啓	野上俊夫	龍山義亮	谷本富	富士川游	澤柳政太郎	唐澤光徳	巖谷秀雄
	森川正雄	弘田長	土川五郎	棚橋源太郎	藤井利譽	佐々木秀一	岸邊福雄	乙竹岩造
	湯原元一	松本亦太郎	野口援太郎	田子一民	藤五代策	下田次郎	久留島武彦	太田孝之
	吉田熊次	槇山榮次	乗杉嘉壽	高島平三郎	福士末之助	菅原教造	倉橋惣三	大瀬甚太郎





第 一 號 幼 兒 教 育 の 第 二 十 六 卷

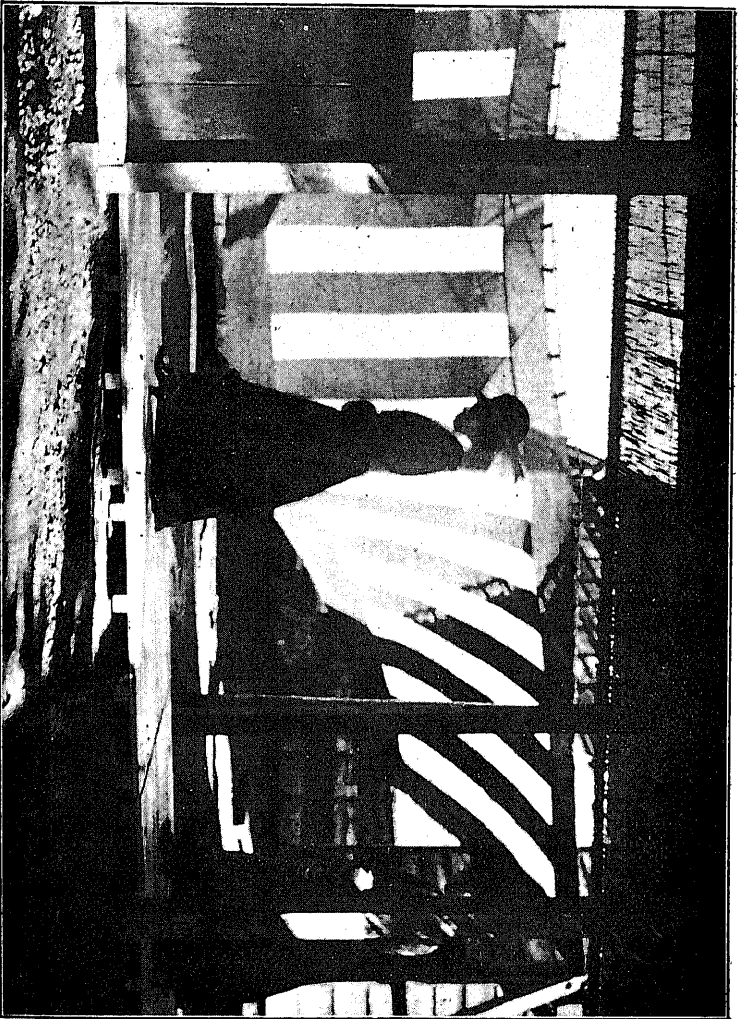
—(次 目)—

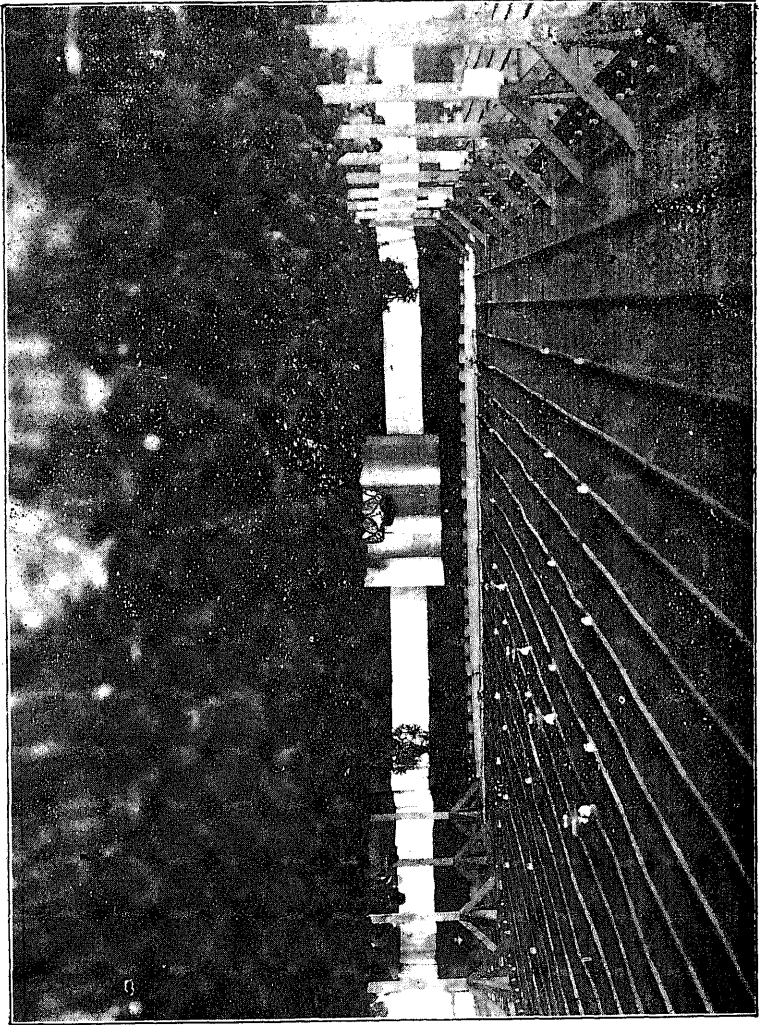
御令旨……………	三頁
大臣祝辭校長式辭……………	三頁
東京女子高等師範學校開校五十年記念式だより……………	三頁
堀……………	七頁
本邦幼稚園教育創始滿五十年……………	八頁
堀……………	八頁
内親王殿下御誕生……………	一五頁
記……………	一五頁
皇孫御養育の御革新……………	一九頁
遠山椿吉談……………	一九頁
さびがら細工(其三)……………	二四頁
山形……………	二四頁
田舎の幼兒を集めて……………	三〇頁
山村きよ……………	三〇頁
育兒叢談(七)……………	三五頁
記……………	三五頁
幼兒を入園させて……………	四三頁
母の一人……………	四三頁
子供の世界……………	四四頁
水島さゆり……………	四四頁
智慧くらべ……………	四七頁
金子彦二郎……………	四七頁
長編 兼ちやん……………	五四頁
小説……………	五四頁
岡田美津……………	五四頁





るらせらあ御臨に式念記





場式念記年十五





號一第 育教の兒幼 卷六十二第

月一年五十正大

- 一、教育で家庭教育位重要なものはありません。家庭教育の良否は實に人一生を支配し國家の發展を左右するのであります。最近の學術は益々家庭教育の重大なる使命を立證し近時の社會現象は善良なる家庭教育の必要を痛感せしめてゐます。
- 一、家庭教育の短を補ひ幼児の心身を充分に發達せしめ將來受くべき學校教育の基礎を築くものは幼稚園教育であります。幼稚園教育の重視すべきことは天下一人も異議がないのであります。
- 一、幼児の教育は本邦唯一の幼稚園教育に關する發表機關であります。而してまた本邦唯一の家庭教育雜誌であります。
- 一、幼児の教育は幼児の教育、即ち家庭に於ける教育と幼稚園に於ける教育、更に小學校初學年教育に關する事項は細大となく網羅し、以て家庭教育の向上を計り、幼稚園教育の進歩發展を期する大抱負をもつて産れたもので有ります。

## 御令旨

茲に親しく開校五十年記念式を擧ぐるの盛事を見る欣悦何ぞ勝へむ  
昭憲皇太后曩に開業の式に臨ませられ深く當路の計畫を佳尙し女子教育  
を發展せしむべきことを親諭せらる 惟ふに今日の興隆由て來る所已に尙  
し従事の人常に志を茲に置き又能く時世の進運に鑑みて懈ることなく業を  
修むる者亦意を潜めて訓育の國家人心と須くも離るへからざる所以を究め  
は庶幾は、遺範に副ふことあらむ 各自其れ之を勉めよ

# 文部大臣祝辭

本日東京女子高等師範學校が開校五十年記念の式典を舉行するに當り畏くも

皇后陛下行啓あらせられ優渥なる令旨を賜ふ　これ獨り本校無上の光榮たるのみならず教育に従事する者の齊しく感激措く能はざる所なり

抑も本校は女子教育の淵源にして風教化育の依つて生ずる所なり其任や重且大なりと謂ふへし　開校以來常に皇室の優眷を蒙り屢尊貴の臺臨を辱うするも亦これが爲なり　而して歴代の當事者皆其の人を得一致協力克く職務に踴勉せしを以て創立當時の微々たりし本校は年と共に隆昌に赴き今や附屬の高等女學校小學校幼稚園其の他保育實習科臨時教員養成所等の生徒兒童幼兒を合せて二千有餘人の多きを算ふるに至れり　校舍は曩に大震災災の厄を被り復興の業未だ成らずと雖も時勢の進運に應じて常に其の内容を充實改善し本邦女子教育の振興に寄與する所鮮少なからず　明治八年開校式の際

昭憲皇太后の自今此の校の旺盛に赴き女教の美果の全國に蕃結するを觀んと望ませ給ひし令旨に副ひ

奉るに庶幾らんか

然れども當今の世態を察するに本校の責任更に一層重きを加ふるものあり 本校職員たるもの夙夜に省察を加へて生徒教養の途に努力し宜しく華を去りて實に就き輕佻浮薄を斥けて質實醇厚に歸し貞淑溫雅節操を尙び自制を重んずる我國固有の婦徳を宣揚し以て人の師表母儀たるべきの修養を深からしむべし 此れ實に本日賜はりたる令旨に答へ奉る所以の道なりと信す

茲に本校の開校五十年を慶賀すると同時に深く其の將來に矚望する所あり 聊か蕪辭を陳じて祝辭となす

大正十四年十一月二十九日

文部大臣 岡田良平

# 東京女子高等師範學校長式辭

畏くも 皇后陛下深く御心を教育の事に注がせ給ひ本日開校五十年記念式を擧ぐるに當り本校に 行啓あらせられ優渥なる令旨を賜ふ 本校の光榮何を以てか之に加へん 願れば明治八年本月本日

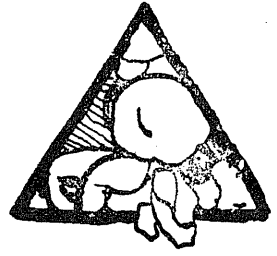
昭憲皇太后の行啓を仰ぎて開校の典を擧げしより常に皇室の優恩を拜し今又特に此の光榮を辱うす感激洵に措く所を知らず 抑も本校沿革の概要を繹ぬるに明治初年學制頒布せられてより當局は廣く世局の進運に鑑み女子教育の忽にすべからざるを察し明治七年地を此所に相して始めて東京女子師範學校を設立せり是れ實に本校の起源なり忝くも 昭憲皇太后之を嘉し給ひ翌年經營成て開校の式を行ふや即ち臨蒞あらせられて深く他日の効果を庶幾し給へり 女子教育の源泉爰に定り本校の基礎之に依て確立す爾來年と共に施設を加へて明治九年附屬幼稚園を起し後二年にして附屬小學校を設け更に四年にして附屬高等女學校を置きしより學制の釐革と共に或は本校を東京師範學校女子部となし或は更に高等師範學校女子部と呼び後分離して女子高等師範學校となし遂に明治四十一年を以て東京女子高等師範學校と稱するに至る 而して本校の創規に當ては小學師範科を置く事多年なりしが制度の改善に伴うて高等師範科を設けしより女子師範教育及高等女學校の教育に従事するものを養成し兼て普通教育及幼兒保育の方法を研究するを目的とし明治三十年始めて學科を文科と理科とに分ち次て技藝科を加へて後に之を家事科

と改め更らに幾多の科を設けて以て今日に及べり 而して別に第六臨時教員養成所の本校内に置かるゝ事茲に十有九年に達せり 組織の變遷斯の如く時代の要求に應じては規模を擴張し時勢の趨向に従うては施設を改めしこと一にして足らずと雖も常に聖旨を奉體して教育の要旨を定め又往年拜戴せる御歌を奉じて校歌となし之を教學の鑑として修養の心を昭らし以て他日人の師表母儀たるの道を授けて終始一貫渝ることなく其の業日に就り月に將みて數千の卒業生は出でて所在全國に亘りて力を皇國の文教に盡し之が隆運に貢献するを努めしに圖らざりき一昨年震災は校舎設備の全部を擧げて之を烏有に歸せしめんとは 過去を顧みて今又更に將來の大計を立つべきの時復舊の業漸く其の緒に就き之が完成を急務とするのみならず世運の進歩は女子教育の前途に一日の安處を容さず益々振興を促すこと切なるものあり 此の間に處する任務亦重しと云ふべく日夕省思して匪躬只その足らざるを惧る 而かも本校の今日ある一に昭代の賜にして君國の恩澤によること深きを思ひ忠愛の至誠を捧げて益々教育の精神を振作せんとす 是の心を以て此の事に當り學校相率ゐて夙夜に淬礪し本校の隆昌を致して國運の伸暢に寄與し以て懿旨に副ひ奉らんことを期す 謹んで之を式辭となす

大正十四年十一月二十九日

東京女子高等師範學校長

茨木清次郎



# 東京女子高等師範學校開校 五十年記念式

取敢へす前號に於て大要を報告したのでありますが、去年十一月二十九日に於ける東京女子高等師範學校開校五十年記念式の狀況を更に報告いたします。開校五十年の式典は大講堂に於て左の次第によつて行はれました。

## 開校五十年記念式次第

東京女子高等師範學校

大正十四年十一月二十九日午前十時

學校長御先導

臨 御

(總員最敬禮)

唱 歌 「君か代」 (總員起立)

御 令 旨

(總員最敬禮)

學校長式辭

(職員生徒兒童起立)

文部大臣祝辭

(職員生徒兒童起立)

卒業生總代祝辭

(卒業生起立)

生徒兒童幼兒總代祝辭

(生徒兒童起立)

唱 歌

「みかゝすは」

(總員起立)

學校長御先導陳列品室へ奉導

(總員最敬禮)

陳列品御巡覽

入 御

二

前日の大雨は夜半より名残なく晴れて十一月二十九日は小春日和の快晴でありました。午前八時半までに登校した全校二千の生徒兒童幼兒は本校正門前の廣場に溢れて電車通りにまで整列してこの日特に行啓遊ばされる。皇后陛下の御車を今かくと御待ち申上げて居ります。陛下には午前九時三十分御出門。同四十分早や先驅がお茶水橋に見えました。陛下には午前九時四十五分東京女子高等師範學校生徒兒童職員來賓の奉迎裡に立關に着御あらせられ、直に御便殿に入御あらせられました。岡田文部大臣同



夫人茨木校長に拜謁を賜はり、程なく學校長御先導にて記念式場に臨御あらせられました。

式場には來賓舊職員百有餘名、卒業生たる櫻蔭會員作樂會員みどり會員等東京市並に近縣在住者七百名、東京女子高等師範學校生徒、附屬高等女學校小學校生徒更に第六臨時教員養成所生徒と二千の生徒が奉迎より直に式場に繰込み今や靜肅に控えてゐます。また附屬幼稚園幼兒百六十名は最前列に整列してゐます。ピアノの合圖にて總員三千人最敬禮の中に

皇后陛下は式場に臨御あらせられました。

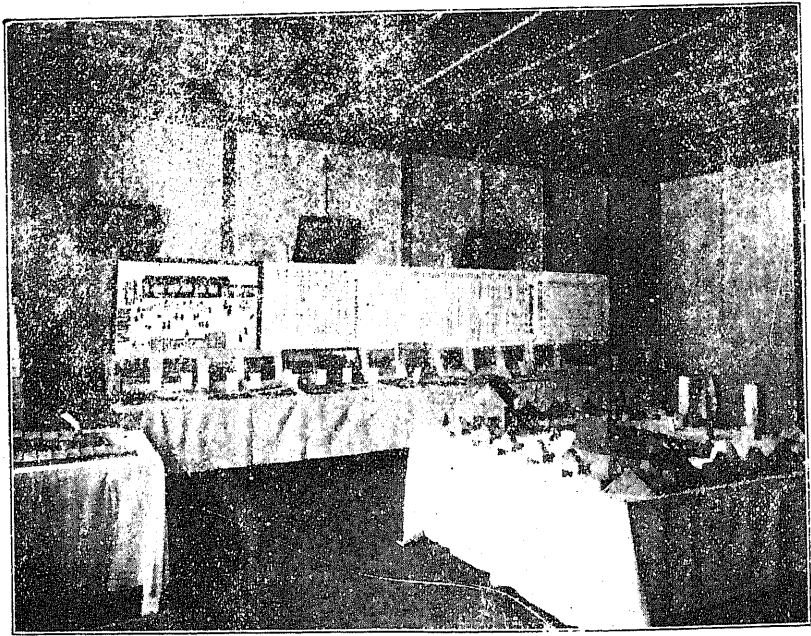
唱歌君か代の後 皇后陛下より御令旨を賜はりました。このとき幼稚園幼兒は靜かに退場したのであります。次いで學校長の式辭文部大臣の祝辭の朗讀があつて次第書の如く式は莊嚴の裡に進行し、みがかずばの唱歌を以て式が目出度く終はりました。そこで學校長御先導にて陳列室へ奉導申上げたのであります。

### 三

先づ特別陳列室にて開校以來賜はりたる數々の御令旨 昭憲皇太后の御遺物等を御巡覽あらせられ第一陳列室幼稚園に御成りになりました。幼稚園陳列室には幼稚園創立當時の寫眞、フレーベル著人間の教育等當時の幼稚園教育に關する書籍、フレーベル恩物、士太牙氏東京女子師範學校附屬幼稚園著の恩物圖形等より明治十年代の幼稚園監事保姆幼兒の寫眞を陳列し、壁面には附屬幼稚園沿革年表、明治九年制



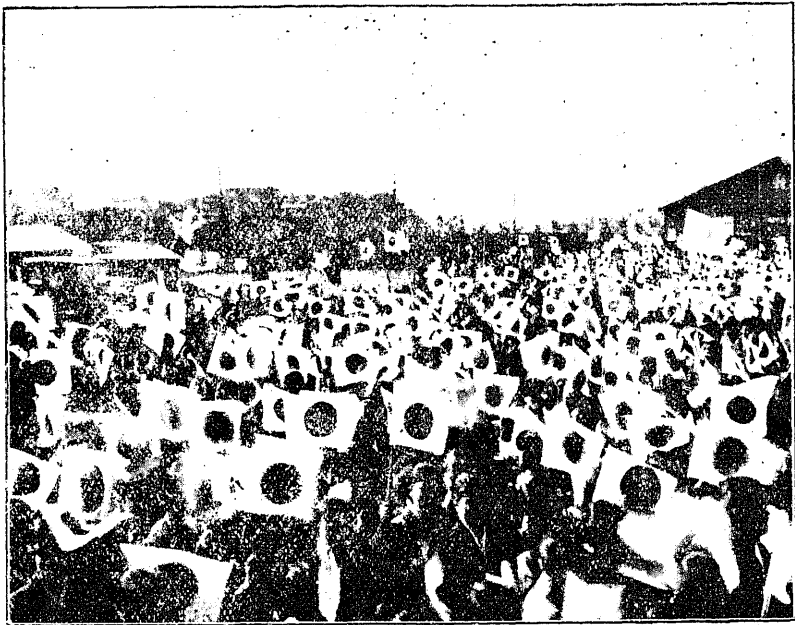
定保育課程表、明治十一年制定保姆練習科の課程表等を掲げ、更に明治二十年代の保育室遊戯室寫真各年代を追つて主事保姆幼兒の寫真、幼稚園生活を示す寫真成績品等を陳列しモンテッソリー氏感覺練習玩具を配して陳列してありました。また窓際には大積木にて自働車をつくり室の中央には粘土、切抜を以てつくりました象・鴨・鶴等の動物、池、ヒル氏積木の塀を圍らせる幼兒合作の動物園がありまた一方の壁面には幼兒のぬりゑ、自由畫を掲げキビカラ細工、粘土細工、切抜細工、切紙細工等を陳列してあります。皇后陛下には御在園當時の藤棚、遊戯室保育室の有様を示す古き寫真に御眼をと



めさせられ、御幼少の當時をおしのび遊ばされました。またモンテツソリーの玩具に御注意遊ばされ、幼児のきびから細工粘土細工には御笑遊ばされたる様子に拜せられました。かくて

陳  
皇后陛下には小學校女學校本校の各陳列品を御巡覽遊ばされ最後に五十年間の歴史を表はす幻灯映畫を御覽遊ばされ廊下にて拜謁を賜はりました。先づ二十五

室  
年以上在職せる十三名の職員に拜謁を賜はり次いで開校當時の職員跡見豊田兩女史更に御在園當時の職員後閑、佐方、岡穂積、今立の諸氏に拜謁を賜はりました。そして更に現職員（高等官）にも謁を賜はり御機嫌美はしく御便殿に入御遊ばさ



れ御少憩の後來賓職員生徒兒童幼兒奉送  
裡に御還啓遊ばされました。時は正午を  
過ぐる十分であります。

## 四

午後一時より全校職員生徒兒童幼兒は  
一齊に校庭に集合した。手には國旗をか  
ざし校歌を歌ひつゝ、幼稚園幼兒を先頭  
に校庭で旗行列を行ひました。來賓も卒  
業者も順次に加はり行列は校舎を取圍ん  
で校庭に散開してゐます。こゝにもかし  
こにも祝賀の歌や萬歳の歡呼がどよめく  
有様、順次列は校庭にうづを巻き校長職  
員を取巻き集合し午後二時宮城を遙拜し  
つゝ校長の發聲で、天皇陛下萬歲三唱皇  
后陛下萬歲三唱皇太子殿下萬歲三唱皇太

子妃殿下萬歲三唱、更に東京女子高等師範學校の萬歲を三唱して旗行列を解散したのであります。

## 五

二十九日午後は來賓、卒業者の陳列室觀覽があり、午後四時より五十年記念會主催二十五年以上在職者記念品贈呈の式が大講堂に行はれ、引續いて五十年記念大祝賀會が催されました。

また三十日午前九時より五十年記念講演會が大講堂に於て開催せられ、岩川友太郎先生、後閑菊野先生及び柳澤政太郎先生の女子教育の歴史將來の女子教育に關する講演がありました。午後零時半よりは記念音樂會が大講堂で行はれ安藤幸子先生のヴァイオリン、長坂好子先生の獨唱、萩原英一先生のピアノ更に生徒有志のコーラス、海軍軍樂隊の管絃樂の吹奏があつて歡聲裡に五十年記念祭が終つたのであります。

(大正十四年十二月十日 堀 生)

## お断り 前號に於て

皇后陛下東京女子高等師範學校五十年記念式に行啓遊ばさるるの  
記事を不適當な所に掲載いたしました不注意をおわびいたします

## 本邦幼稚園教育開始滿五十年

明治八年九月幼稚園開設が當時の文部省に於て決定せられ、明治九年六月東京女子師範學校と並んで本郷區湯島に一幼稚園が設立せられ幼兒保育を始めたのが實に本邦に於ける幼稚園教育の嚆矢である。尤も明治八年に於て京都柳池學校内に保育所が設けられた。しかし半歳ならずして止められたから東京に官立幼稚園が設立せられたのが眞に幼稚園教育の嚆矢といつて差支ない。而して明治九年より大正十五年まで實に滿五十年の歲月を經過してゐる、此五十年間に幼稚園教育は漸く發展しつゝある。小學校教育は義務教育として全國に普及すべきこと勿論であるが、中等教育たる中學校高等女學校の教育が著しく進歩發展せるに比すれば幼稚園教育は實に僅かな發展である。幼稚園、託兒所の數に於ても保姆幼兒の數に見るも實に僅少なる數量にすぎぬ。また幼稚園令が五十年を経た今日に於て漸く審議を終はり發布せられるといふ有様にては萬事につけ幼稚園の前途は實に發展すべき餘地に富むものといはねばならぬ。尤も幼稚園教育は家庭教育と密接なる關係を保つべきものであるから幼稚園教育は家庭教育の進歩と相待たねばならぬ。兎に角今年六月は幼稚園教育創始以來滿五十年に相當することを大に祝賀せねばならぬと共に將來大なる發展を期する覺悟をなさねばならぬ。(堀生)

【宮内省告示第二十九號】 皇太子妃殿下本日

午後八時十分東宮假御所に於て御分娩

内親王御誕生あらせらる

大正十四年十二月六日

宮内大臣 一木喜徳郎

## 御母子共お健やか

皇太子妃殿下にはかねて御妊娠にわたらせられ、その後順調の御経過をとらせられて月を重ね十二月六日午後八時十分皇孫女子めでたくも御誕生あらせらる、げにわれら國民翹望の大慶幸事、赤坂御所の内外によるこびは充ち、瑞氣あふるゝを見る、榮光にかゞやく萬世一系のたふときみすぢを傳へて、津々浦々のいやはてまで滿歡喜にどよめきわたり、仰げは殿上高く皇孫生誕の夜は古きもの語りをそのまゝに月まだ見えぬ大空に明星高く爛として輝いた。

◆お産聲呱呱とその剎邦お側の人々思はず感激に涙す、妃の宮御産氣お催しと拜したのは六日午後三時ごろで初冬の風冷えぐくと樹葉をふくうすら寒い日であつた、玉體まれにもすこやかに順調の経過にお

はしたこととて俄の事にもそれとうたがひなきまま塚原侍醫ならびに急きよお召しになつた磐瀬御用掛  
かりは共々に拜診申し上げたところ、陣痛發作の御模様、間歇の時間など、はや御分娩第二期も間近く  
すゝんでをられたので、おそばにつきそひまゐらせてゐた助産婦梅林寺幸子、坂田明子の兩女はいさゝ  
かのうろたへもなく、共に白帽白衣の消毒した助産婦に著かへのうへ、二名の看護婦とお左右から介ぞ  
ひまゐらせたので、妃の宮には殊にごきけん晴れ々として靜かに淨らかな御産殿にお入りになられた  
御産殿には兩助産婦と二人の看護婦の外、島津女官長身じまひかたく肅として控へた、妃の宮には直ち  
にゆるやかな雪白の御産著に御更衣あり、いつもは仰ぎ見るみどりのおぐし、一すぢの亂れをさへ拜せ  
ぬ端麗なお束髪も、坂田明女の手に櫛卷の形とあげられ上をば白羽二重の紐もてキリ、と堅くお手づか  
ら結ばれたとうけたまはるだに沈著におはすふだんの御態度、妃の宮のいまさらに御母性とならせ給ふ  
力強き御意氣のほどもしのばれる、斯くて時移ればやみ夜の大空をついて、煌々とはなやかに灯の色は  
赤坂台の一面を明るく浮かせた、いひしれぬ緊張の氣は御所をこめて時こまやかにさざみゆけば、もの  
靜かな中にさゆらぐ御よろこびのおとづれば參殿の高官、仕人達の胸にも明るい豫感を滿々とみなざら  
せ、折柄潮時よしとみて奥殿の一室には山岡、青山、油小路の高等女官たちは齋戒沐浴の身をしづかに  
燭幣をさゝげて安産の護符に念願をこむる折柄、大奥の空氣俄にさゞめき立ち、すはや高朗たるお産聲  
呱呱として、殿程にさえ、内親王さまはいまし安らかに御誕生になられたのであつた、尊きみすぢをう



けつぎ給ふれいろう玉の如き尊き御姿よ、その一瞬、天地萬象を壓してげに神嚴崇高かぎりなく御左右  
みなぞるる感激の涙のわくをおぼえた、

◆御まるくくと愛くるしさ御體量八百七十三匁、御身長一尺六寸三分御後産も滞りなく。

内親王御誕生と同時に控への磐瀬博士は直ちに『午後八時十分内親王御誕生』と記録しまつり、とり  
あへず塚原博士は内親王さま御誕生後一切の處置を滞ほりなく濟まされ、看護婦のすゝめまゐらす櫓  
づくりの大たらひにたゝへられた御産湯を召させ參らす、丸々としてつやゝかなふとりじしの長けれど  
も御みめかたちは御兩親宮に似かよはせられ殊の外の愛くるしさ、母宮様の御健康をうけて御發育いと  
も見事に御體量八百七十三匁、御身長一尺六寸三分と拜される、なほ母宮には九時二十五分御後産も滞  
りなく濟ませられすこぶる御健康に拜察される。

◆御産後御順調【磐瀬御用掛發表】東宮妃宮殿下は午後三時四十分御産殿に移らせられ漸次御陣痛重  
くならせられ午後八時十分内親王御分娩あらせられ九時十分御後産あり同二十五分滞りなく御後産を  
はらせられ御産後の御經過順調にて何等御異狀あらせられず。

◆けふ「紅の間」に御劍を賜ふの儀皇孫初の御儀式

内親王殿下御誕生につき初の御儀式として今七日午前十一時御所内紅の間において『劍を賜ふ』の儀  
が行はせらるゝが、この日定刻松浦侍従は勅使として御劍並に御袴を捧持して御所に參入、本多事務官

は紅の間に誘引し珍田太夫に面接の上御劍御袴を受け更に太夫は東内謁見所に參進東宮殿下の御前において勅使の傳宣を言上後、太夫は御劍を皇孫御休所に奉じ島津女官長これをやうやく皇孫殿下に奉る次第である、なほ十二日午前九時に『三殿奉告の儀』『浴湯の儀』があり、同午前九時五十分には『命名の儀』がある、三殿に謁する儀は明春一月二十四日である。(東京日日新聞による)

宮内省告示第三十三號

本月六日午後八時十分御誕生在らせられたる内親王御名を成子と命せられ照宮と稱せら

大正十四年十二月十二日

一木喜徳郎



## 皇孫御養育の御革新

醫學博士 遠山椿吉談

昨年十一月廿六七日東京日日新聞通俗講話欄に掲載せられたものであります。

◎皇孫御降誕の日近づき、國家を舉げてその佳辰を翹望してゐる折柄、この程新聞紙上にて漏れ承る所によれば、このたび御降誕の皇孫殿下を初めとして、御生母自から御授乳あり、御手元にて親しく御養育遊ばさるゝ事に御治定あらせられたとの御事である。この事を拜聞したる私は、思はず驚嘆しまた歡喜した。その次第は、何時の代からかの御恒例として、高貴の御生誕には、然るべき家柄を選んで御養育を仰せ付けられ、立派な御乳の人をつけて御乳を上げられるのであつた。さるを、このたび永く久しき右の舊例を御改めになつたのは、誠に天地自然の法則に基かれた偉大この上もなき御英斷と拜察したからである。そこで今私が斯く驚喜した理由を、自分の立場である醫學の方面から、少しく説明さして戴きたい。抑々婦女子が妙齡になると、その體内で月々自家榮養に必要な分量以上の血液の製造が起こつて來る。この血液は、將來胎兒の宮殿である所の子宮に輻湊して、胎兒といふ賓客の來るのを待つ

てゐる。併し來客なき間は、この餘分の血液は月々時を定めて體外に排除される。これが即ち月經の潮來であつて、いはゞ將來の妊娠に備ふる生理上重要な準備の現象である。ついでにいふ、この血液は悪血でもなければ、汚血でもなし。尊き純血である。それで月經を「婦人の汚れ」など、唱へ、更に神聖なるべき産褥までも不淨事と考へたのは、未開時代の謬想である。さて、一朝妊娠が初まれば、この血液を以て先づ子宮の増大擴張と、胎兒榮養の資にあてられる。即ち宮殿の臨時増築と、殿裡の賓客の御馳走に用立てられるのである。

○やがて月滿ちて分娩し、胎兒といふ賓客が立ち去つた後は、この血液は、子宮部には不用となるのでこの方面を引き揚げて初生兒の榮養に缺くべからざる食糧製造所兼寶庫ともいふべき乳房の方へと廻される。この時から臨時増築された宮殿（即ち増大された子宮）の不用の分は秩序よく取り崩されて舊時の規模となる。つまり子宮は平常の状態に復するのである。一方乳房に廻された血液はその後盛んに乳汁といふ食糧を製造して宮殿を出て、娑婆と名づける旅に上つた桃太郎や、かぐや姫にかねらの消化器の完成するまで、數ヶ月の間、日々消化吸収し易く、しかも滋養に富める御辨當を差し出すのである。斯くて太郎や姫が齒も生え、普通の食物に堪へるほどに生長した頃になると、乳房の製乳作用も事業縮小をはじめ、これと前後して完全に復舊した子宮の宮殿に血液が戻つて來て、月々の經水となる。斯くして下の宮殿も、上の製造所も、常態に復するのは、生理上の正しき現象であり健全なる人體繁殖の順

序である。若しわれ／＼が自然の順序に従はず、天則に戻つた動作に出たならば、右の現象がどうなるであらうか。今生れた兒を母の手より引離して、生母の乳を與へず、他の方法によつて兒を養育したとすれば、兒と母の身體とに當然次のやうな異常事件が起こつて來なければならぬ。先づ母體は乳汁の分泌が不用になるから廢用萎縮といふ生理上の原則によつて、乳汁製造が日ならずして停止する。即ち乳があがつてしまふ。さうなれば子宮より乳の方へ廻された血液の供給所を失つて吐け口がなくなつたわけである。その結果、子宮の増築材料であつた血液が行き場を失つて子宮に逆戻りし、その増築事業の材料が蓄積鬱滯するため、分娩後の縮小工事を遅延ならしめ、子宮の復常作用を妨げる。

◎生兒に母乳を與へず、他の方法によつて養育すると、上述の理由により、子宮の復常作用を妨げるさうなると、實際産後の肥立が悪く、收縮不完全にして軟弱な子宮は、色々の原因によつて容易に子宮病を惹起し、續いて諸種の婦人病を誘發する。子宮後屈とか内膜炎とか不娠症とかヒステリーとかいふのは、多くこれである。又乳が早くあがるために、月經の再來も早くなり、妊娠も近くなるのもまた自然である。これ等は皆、授乳といふ天則にそむいた刑罰と考へて宜しい。次に生兒の方にはどんな結果を見るかといふに、自己の生命保續、發育生長に要する大切な栄養物は、胎内で自己の身體を作つてくれた母の血液以上のもののある筈はない。したがつてこれで製造せられた生母の乳汁は生兒に對して最上肥好の栄養物であることは何人でも想像に難くないのみならず、母乳はその兒に授かつた神の賜もの

である。兒はこれを吞むべき先天的の權利を持つてゐる。それを暴虐なる母親がこれを掠奪して與へないのは不條理であるともいへる。そは兎も角、母乳の尊むべき理由を生理上から少しく解釋せんに、凡そ完成した人體なれば、その榮養物は咀嚼、消化、吸收、類化と四段の作用を経て身體の組織となるのである。そして最後の類化が最も大切な作用であるから、類化の容易なものほど、それだけ榮養物として價値のある事となる。又一方に人間の血液は、その血族關係の稀釋となればなるだけ血液性質の差異が大きくなる。従つてこれが體內に入つての類化が愈々困難である事は、近時血液學上の闡明する所である。この理論によれば外觀同じ様に見ゆる乳汁でも、更に化學上に分析して同じ成分と見ゆる乳汁でも、縁の遠い婦人の乳汁と、眞の母の乳汁とは、自から性質の異なることが察せられる。乳汁でさへあればどれでも同一であると考えへるのは、微妙なる自然の現象を知らぬからである。

◎乳汁はその婦人の年齢、體質、分娩の時期等が違へば皆著明の差があることは、すでに明白なる事實である。されば生兒に對しては、生母の乳汁ほど理想的な榮養物はないので、それを生母の授乳を止めて他人の母乳を與へるのは、生理の自然にもとる不合理、不適當なる哺育法といはねばならぬ。この理法よりして人乳に代へて牛乳又は他の獸乳を用ゆるは更に不合理を重ねるものである。いはんや、他の食物、例へば乳粉、小兒粉の類を與ふるにおいては、益々自然に遠ざかるもので、ために生兒の發育生長の上に種々不良の結果を來たし、遂には虛弱に陥らしむる事となる。右の如く生母授乳の廢止は、

母體の上にも、兒體の上にも、甚だ不利なる影響を來たし、進んでは母兒體の將來に恐るべき結果を遺すものである。ゆゑに生母の授乳廢止は「母の現存する以上、母體に一定の疾病があつて、母兒双方に悪影響を來たす恐れある場合に限り、止むを得ず行ふべきもの」との法則によるべきである。然るに世間、殊に上流社會において安逸を貪り、享樂にふけらんがために、これを敢てし、生兒を遠ざけ、養育を怠り、兒を他人の乳母に託するの徒あるを見る。又歐米諸國の母も授乳を親らせず、牛乳を以て之に代へるの惡風滔々として俗をなすといふ有様、實に自然に反し、天則にもとるの罪惡をさとらざるものといはねばならぬ。さるを、今回わが皇室の御英斷は、たゞに御母子の圓滿健全と皇統不朽の大本を作らせらるゝのみならず、人生々活はすべて科學の理想に基づき、天則を尊ぶべき典範を示され、更に内外無智の徒に生兒哺育法の誤謬弊風を改むべき大教訓を垂れさせられたものと拜察する。こは草ばの學究る私一人の驚喜に止まらず、七千萬同胞のひとしく感ずる所であると思ふ。腰折一首以て千古無比の佳例を開かせられたる事をことほぎ奉つる。

天地とともにくちせじあめつちの

おきてふみますわがすむつは。

(完)

# きびがらの細工 (其三)

東京女高師訓導 山 形 寛



五、きびがらを棒状のまま用ひて構成する教材(續き)

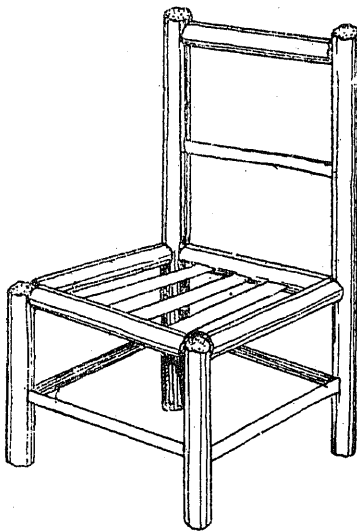
## 七、椅子

第八圖に示した様な形の椅子は、前に説明した

寢臺の、長さが短くなり高さが高くなつたに過ぎないのである。従つてその工作法も寢臺に準ずればよいのであるが念のためその大略を左に述べよう。

(1) 先づ次に擧げる如き諸材料を作る。中位の太さのきびがらを長さ約十五センチに切つたもの二本(後方左右の柱)、同じく長さ約七センチに切つたもの二本(前方左右の柱)、同じく長さ約五セ

ンチに切つたもの五本(各所の模稜)と、きびがらの皮をやや廣くさいいたものを長さ六センチ半に切つたも八九本とを作る。



第八圖 椅子



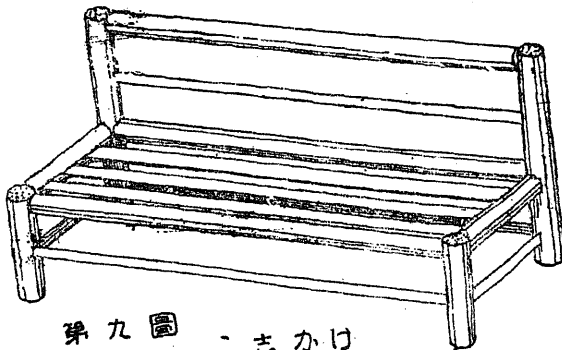
(2) 長さ約十五センチの棒二本、長さ約五センチの棒二本と、長さ約六センチ半の皮二本とで椅子の後方の部分を組立てる。その組立法は寢臺の頭の方の部分の工作法に準ずればよい。

(3) 長さ約七センチの棒二本、長さ五センチの棒二本と、長さ約センチ半の皮一本とで椅子の前方の部分を作り、前工程で作った椅子の後方の部分の下半分の形と同じ形にする。その工作法は前工程に準ずればよい。

(4) 第二第三の兩工程で作ったものを、長さ約五センチの棒二本と、長さ約六センチ半の皮五本乃至六本とで接合して第八圖に示す如き形とする。この組立方は寢臺の最後の組立方と同様な方法と注意とを以てすればよい。只椅子の腰を掛ける上面を構成する皮の数は圖には三本になつて居るけれども、四本でも五本でもよい。皮の幅の比較的廣い時は數少く、狭い場合には數を多くすればよい。

い。

(5) 最後に全體の歪を修正して仕上げる。



第九圖 こまかけ

## 八、腰 掛

第九圖は長い腰掛である。これが工法は前課の椅子及び前々課の寢臺に準ずればよいのであるが、その大要を説明すれば次の通りである。

(1) 先づ次に擧げる様な諸材料を作る。中位の太さのきびがらを長さ約十二センチに切つたもの三本、同じく長さ約七センチに切つたもの二本、同じく長さ約四センチに切つたもの二本、同長さ約三センチに切つたもの二本、きびがらの皮をやゝ幅廣く割つたものを長さ約十三センチに切つたもの六七本、同じく長さ約五センチに切つたもの二本とを作る。

(2) 長さ約七センチのきびがら一本と、長さ約四センチのきびがら一本と、長さ約三センチのもの一本と、長さ約五センチの皮一本とで椅子の側面をなす材料を組立てる。これは同形同大のも

の二個を作る。

(3) 第二工程で作つた兩側面をなす材料にそれら棒狀のきびがら及び皮を第九圖に示す如く接合し、歪をなほして仕上げる。

この工作は最後の結合に用ふる材料の数が比較的多く且つ長いから、初めから注意してやらないとうまく行かないこともある。

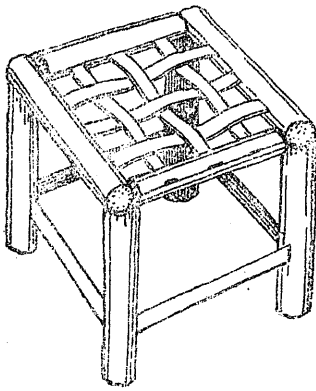
若しこの工作に於て第九圖に示すものと少しくやり方を變へて、椅子を作つた時の如く初めに後方の面をなす部分と前方の面をなす部分とを作り然る後に兩者を結合する様にして、腰を掛ける上方の面に用ひた皮の割つたものは、短い材料を横に數本併べる様にすれば(即ち第九圖に示したものと直角をなす方向に)工作は幾分樂になる

又上方の腰を掛ける部分をなす數本の皮を全然止めれば兒童幼兒にも樂に出来る様になる。尙ほ又之を用ふるにしても、大體の骨組を作つてから

後に、側方から横棧になつて居るきびがらを刺し通して作れば餘程作り易くなる。(寢臺の工作法の説明の終りに述べた結合法参照)

## 九、小椅子

第十圖に示した様な倚りかゝりのない椅子(腰子と云つてもよい)の製作は、前に述べた二三のものよりも容易であるけれども、圖に示した様に上面を格子に組むことには多少の技巧を要する。左にその工作法の一斑を述べやう。



第十圖 小椅子

(1) 中位の太さのきびがらを長さ約七センチに切つたもの六本と、同じく長さ約五センチに切つたもの二本と、幅を二三ミリに割つた皮を長さ約八センチに切つたもの七本と、幅二三ミリに割いて皮を十センチ位に切つたもの三本とを作る。

(2) 七センチきびがら二本と、五センチのきびがら二本と八センチの皮とを結合して、ほぼ正方形をなす枠の中に皮の棧の三本ついたものを作る

(3) 第二工程で作つたものに、長さ約十センチの皮を側方から刺し、先端で初めに作りつけて置いた皮の棧を縫ふやうに通して、圖に示す如き格子を作る。而して尙ほ剩した皮の餘分に残つて居る部分を缺で切りとる。

(4) 次に残つて居る四本のきびがらと、きびがらの皮とで四本の脚を組立て、然る後に第三工程で作つた枠に結合し、歪をなほして仕上げる。

この工作に於て格子に組む皮はあまり幅が廣く

てはやり悪い。特に後から刺して組む材料は然りである。又この格子は細かく組めば出来上りはよいけれども、それだけ困難が多いから三本づゝ位でよい。

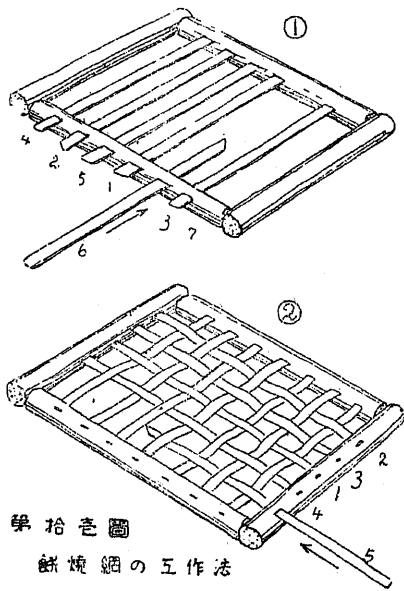
前に作つた寢臺、椅子、腰掛等の上面も、本教材で説明した様に格子に組めば一層面白くなる。然し形の關係上初めて枠を作り格子組をしてから全體を組立てることの困難な形のものに於ては、格子組をやつて居る間に先に組立てた諸部分に狂を生じたり、ゆるみが來たりしてうまく行かないものである。

この教材は幼稚園では困難であらう。尋常二年位ならば大抵の兒童には出来る。

## 一〇、餅焼網

第十一圖は餅焼網の工作法を示したものである。これは平面的なものであるから、一見工作が容易

のやうであるけれども、實際はそう簡單に行かないもので多少の技巧を要するものである。



餅焼網の工作法

この教材はあまり兒童の興味を引くものではないかも知れんが、然しきびがらの性質をよく利用したものとして技巧的方面から見れば可なり面白いのあるもので、この點をよく理解させてやらせて見れば、案外面白い結果を見ることも出来やう

その工作法は次の如くするのである。

(1)長さ約十二センチのきびがら四本を組合せて長方形の枠を作る。この枠は二本の内側に入れた棒を少し長くして置いて今少し細長い長方形にしてみよう。

(2)きびがらの皮を幅二三ミリに割いたもの十數本を作る。これはなるべく幅をそろへるがよいとして厚さも厚いのがあつては後で用ふる時にやり悪いから、若し肉がついて居るものがあつたならば鋏の刃か何かでこそげて薄くして置くがよい。厚いよりも薄い方がやりよいからである。

(3)割つた皮の先端を少しく斜に切つてから、枠の内側に入れてある棒の一つの側面から刺通して他の棒に迄通す。その通す順序は第十一圖の一圖に示す數字の順にやる方が各の皮の間隔も一樣になり、且つ組立方も容易である。この組立は一

寸考へれば枠を組む時に縦棧(皮)を外側になる棒に刺して置いて一時に組立てた方が便宜の様に思はれるけれども、さうする時は後で横棧を通す時に接合部に於て横に力が働くために接合部がゆるんで、破損する恐れがあるから、特に普通の構成法から見ると思はれる方法によつたのである。

(4)刺し通した棧の餘分の部分を鋏で切り去る  
(5)次に第十一圖二に示す如く、初めに組んだ枠の外側の棒の外側から、皮の棧を刺し通し、その先端で第三工程で作つた棧を縫ひ乍ら通し進めて、圖に示す如く組む。この棧を通す順序は圖に數字で示してある順序にしたがふが便である。  
(6)棒の餘分の部分を切り去り、歪をなほして仕上げる。

以上述べ來つた教材はきびがらを棒狀のまゝ用

ふ。

ひて構成する教材の例であるが、この種の教材は考へれば甚だ數多くあるであらうが、茲にはこの位で止めて置かう。

又以上述べた教材の中終りの方の數教材は幼稚園で課するとしては困難であるかもしれないが、しかも少しく形を變へれば容易に出來得やうと思

以上述べた教材は何れもきびがらの棒と皮とを併用（表面に見へる場所に）したもののみである棒ばかりで組立てる方がよい教材もあるけれどもきびがら細工としての面白味は使用したものに多いやうであるから、その種のを示したのである。（この項完）

## 田舎の幼兒を集めて

幕張農村幼稚園 山村 きよ

一

新任、しかも始めて出來る、そして農村の子供をこの三つの事に大きな理想を描いて赴任したのはこの四月でした。所は幕張といふ海岸です。豫

め先生からお話は伺つて居りましたが、いよいよ實際の任に當る事になつて千葉縣女子師範學校長平田先生及び附屬小學校主事土屋先生からこの幼稚園設立についての趣意を伺ひました時にはほん

とにびつくりしました。無経験な私にはあまりに責任が重いのに驚かされたのです。なせならば午前中は小學校の低學年を、午後からは幼兒の保育に當らねばならなかつたのです。卒業當時頭に描いた空想はすつかり裏ぎられたわけです。そして不安な心を持ちながらも又新たな希望を持つて開園の日を待つて居りました。色々の都合で漸く五月一日から開園されました。農村といふことを頭において少しは豫想してまゐりましたが、今まで都會で生活し短い期間とはいへ、お茶の水の空氣を吸つて來た私には一つとして物めづらしく感じないものはありませんでした。先づ第一に村の様子、百姓等の生活、毎日登園する子供の言語動作等面白くて仕方がありませんでした。其の上幼稚園とは名のみで園舎はなし、經費はなし、保姆二人に百五名の園兒でどうしやうかと、とほうに暮れてしまひました。先生方や同窓の人達に不平の手

紙をかさねたのもこの時でした。勿論今までは別の形式をとらねばなりませんでした。もつとも始の内は千葉の本園からも出張して戴きました。こんな風で子供にも自然と無理が多かつた事と思つて居りましたが、私も夢中で兎に角、子供の來てゐる三時間餘の間を無事に面白く遊べる様つとめながら不安な日を續けました。しかし幸に子供のお氣に入りの場所となつて毎日の出席は五十人を越えました。ほんとに私も不安ながら一種の光明を得て子供にはげまされつゝ、一月たち二月たち今日までどうやら無事に過してまゐりました。お蔭様でだんく町の様子のみ込んで子供ともなれ、今ではかへつて毎日起る滑稽な出來事に興味を持ちだんく暗から逃れ去られる様な感じがして居ります。こんな風で幼稚園ともつかず託兒所ともつかない、毛色のかわつた幼稚園の生れた事をお知らせすると、同時に御経験多い皆様の御力

を拜借したいと考へて居ります。

## 二、目 的

この農村幼児教育の必要については平田先生が日本教育十月號(十三年度)にくわしくのべて居られました。そしてその翌年五月になつて實際にこの幼稚園となつて現はれたのです。今私は先生から伺つて居ります大體をおつたへ申し上げます。都會には不充分ながら幼児教育の機關は設けられてあり、又現在は幼児教育の聲も高まり色々の研究も發表されてありますが、農村だけは相變らず忘れられて一向發展の様子も見えない様です。しかし農村こそ其の必要があるので。無智な保護者又労働に忙しい一家單調な環境に置かれてゐる幼児こそ大いに教化が必要なのです。都會の子供はたゞ自然に恵まれないで身體の發育上に影響を及ぼすといふ缺陷はありますが、それも現在では各都市で色々と計劃が立てられつゝあるので

から、田舎の子供と比べてはるかに幸福といはねばなりません。しかし此農村では從來のブルジョアの幼稚園を設立する事は不可能な事です。最も容易に又方々へ行はれる様に小學校の組織を利用して農業労働に忙しい父母より幼児を預り、心身の發達に適應した教養をなすと同時に農村母姉の兒童教養に關する知識をひろめたいといふので此幼稚園が出來たのです。そして私と今年千葉の女子師範を出られた土屋まさ子さんと二人がこの任に當り午前中は小學校の一二年を、午後からこの仕事にかゝつてゐるのでございますが理論と實際は一致せず、まして私の様な無經驗な者には果して平田先生の御考へになつて居られる様なよい結果が表はれるかどうか大きな疑問でございます。

## 三、設備及び設置

五月開園當時から二月程の間は設備と云つて書



き立てる程の物は一つもありませんでした。皆小學校の物を利用して居りました。

- 一、園舎Ⅱ小學校一年の教室二室を使用す。
  - 二、遊園Ⅱ小學校運動場の一部分を使用す。
  - 三、保育具1.オルガン一臺、2.手技材料、3.砂遊び道具(シヤクシ(三十本)  
貝殻等)
- ところが二學期になりまして大分揃ひ大いにたすかりました。

- 一、ブランコ四臺
- 二、移動式スベリ臺、二臺
- 三、子供用黑板(二尺巾一間のもの四枚)
- 四、まゝごと道具並に毬(六インチ四個、七インチ二個)
- 五、紅白の旗五十本
- 六、三寸巾五寸の煉瓦型積木三十個及び小さな木片小ざるに三ばい。
- 七、繪本三十冊、(子供の國の月おくれを集めて居ります)

## 五、經 濟

- 一、幼稚園に當られた費用は少しもありません。
- 二、有志の寄附は受けて居ります。
- 三、子供からきまつた月謝は徴收致しません、(但し二月に一度づゝ材料費又はおやつ代として三十錢位づゝ集めます)

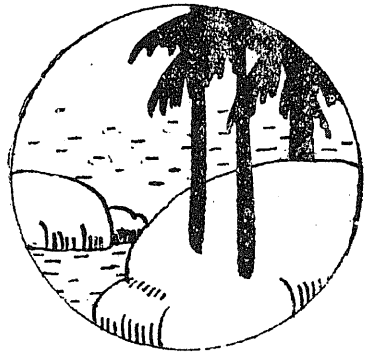
## 六、保護者及び家庭

- 農夫——六七 商人——一〇  
船乗——一一 澱粉製造業者——三  
工夫——三 會社員(東京方面へ)——四  
漁師——三 無職——四
- 海岸ですけれども漁師の專業といふのは少して皆農をなすかたわら船に乘つたり又色々の副業をして居る者が多い様に思ひます。在園兒の五分の一は町でも上流以上で、他は中流が多く下といふのはごく少い様です。しかし都會と違つて總てにおいて私達の想像できない程質素な生活振りに見

受けて居ります。大抵の人が一日の中を殆んど働きつくしておられますから従つて子供の教育はおるか、ある時には子供の事さへも忘れられてゐる様な時も見受けます。夫婦共稼ぎで朝から晩まで仕事にかゝり其の間子供は皆祖父母が預つて世話してゐる者もあれば又自分達の仕事をやる場所へ一諸につれて行つて、たゞ子供の爲たいほうだいの遊びをさせ、いたづらが目にとまれば其の叱責は甚しいので、それが子供の性格に影響を及ぼしてゐる事は申すまでもありません。しかしそれらの人達も子供がにくらしくしてするのではなく、無知のと、労働に忙しいので子供をかへり見る暇はなく田舎、しかも海岸ですから大きな聲して叱責する事や少しぐらひの體罰などは習慣となつてゐるのです。ですから時によるとなめる様にして可愛がり又それが物質となつて與へられるのです。子供の頭には始終この數多い叱責……其の反

對に物質を以つて得る喜びといふ事が深い／＼印象を與へてゐる事と思ひます。私達はいつの間にか一人で子供達からこれらの事を教へられております。この他に震災後東京から移轉した者、又は町の豪家で相當教育ある家庭に育つてゐる者が少しばかりまちつてゐるのでかへつてむづかしい様に考へて居ります。實際これらの家庭に立ち入つて母親の教育否……祖母さんの教育からやりなほさねばよい結果の表はれ様筈がないと思つて居りますがまだ／＼前途遼遠の事だと思つて居ります。

一年の計は元旦にあり



## 育兒叢談 (七)

### ○少年と映畫

——屢々問題になるが餘程注意すべき物——

その影響を考へよ

左の談話は内務省映畫檢閱主任田島太郎氏談として東京日日新聞に載せられたものである。活動寫眞に對する父兄の注意すべき點を指摘してゐるから特に轉載する。

最近の活動映畫に現れた傾向は西洋物では美人の肉體を現したいはゆるハダカ物が多くなつた。

殊に米國映畫にふえたので、その表現は運動競技ダンスの稽古、水泳の練習等に事寄せて、豊艶な肉體を露出して見せやうとしてゐる。體操學校を背景に使つたり、カフェーの中で水泳服でおどつたり、みだらがましいアバツシー・ダンスを見せたりするには風教上事に困るが、それが一層ひ

どくなつて來る傾きがある。日本物の映畫はヒネクれた思想のものと、演劇物が多くなつたが、これは大震災の影響だけでなく別に何か理由があると思はれる。大すかみに考へて見ると、從來の演劇の立廻りは現實味が少なく現代の觀客には不満足たまらぬところへ、澤正等が現れて時流に適した立廻りを見せて歓迎されたが、活動寫眞においては特にほんとうらしく見せると觀客に喜ばれ

る點から、自然に映畫の立廻りがすご味をおびて來た。そしてこれが客に受けるから次第に立廻りが長くなつてあるものは立廻りばかりで全巻を終つてゐるものさへある。要するに現實感の強い立廻りは直感的のもので、頭腦の疲れた人間や、生活難苦イライラしてゐる心の者にはむしろ亂暴な活劇かみだらなものかの二つの流れでないとな面倒臭くて見てゐられないのに、日本物は風教を害する場面や極端な劍劇は檢閲でカットされるから遂にヒネクれたものを製作するやうになるのだから、この種の映畫製作は自己の満足のためとか或は思想がかたまつてゐなくて外國の小説にかぶれて、その思想を噛みくだく力がなくてすぐ作品に應用しようとする若い映畫監督の作品に多いが年長の監督の作品にはよほど考慮した者がある。これは少數である。これ等の映畫の傾向から考へて現在の活動寫眞、つまり興行用の映畫は一般の家

庭殊に、子供には面白くないと思はれる。上野陽一氏、紀平文學博士その他の心理學者の説では、現在の活動寫眞を若い者に見せるには非常に監督を要するといつてゐるが、實際活動寫眞そのものは多少衛生上の心配がある程度のもので、天文、農産、學術その他學校の教材としても非常に利益のあることが、織込まれてゐるが併し他の反面において非常に害毒の多いものである。例へば日本物に殊に多い殺人の場面が觀客には社會にありふれた出來事のやうに印象づけられこれを馴れると性格が殺伐になる。同様に淫猥な場面ばかり見馴れると道徳性が麻痺してくるから遂に危険人物になつて家庭のことは平凡で興味がなくなつて親の涙ある教訓も笑ふべきものと考へ違ひをして、社會經驗がないから活動寫眞を見て自分勝手の社會を造つてしまふからいくら意見をされても根性が片寄つてしまふ。だからわけて子供や若い者に興

行の活動寫眞をみせるのはよくないがもし觀せるなら年長の思想の堅實な立派な判斷力のあるシツカリした同伴者をつける必要がある。社會經驗の淺いものや根性のヒネクれた者は一度確信するこゝとがたとひ間違つた確信であつても根強く持つから一身上だけでなく社會組織の上から實に大きな危険である。同伴者は書生だと寫眞にとらはれるから駄目で、近隣の人と一緒だと監督を忘れるおそれがある。結局一番よいのは両親とか學校の先生或ひは年上の兄弟なら無暴な考へのない者を同伴させるのが良策である。そして今一步進めて映画に對する豫備知識を與へてあらかじめ危険な場面の解釋等に注意して見せる必要があると思ふ。併し教育映画にはこの心配はない。

## ○寒さに向つて

### 赤ちやんの衛生

これは東京朝日新聞家庭欄に於て醫學博士高田義一郎の談として載つてゐたものであります。分り切つたことのやうであるが兎角實際は中々完全に行はれない赤ちやんの衛生について述べたものであるから特に轉載する次第であります。

寒氣の強い季節に生れた赤ん坊の手常として第一に注意すべき事は保溫の關係です。赤ん坊は大人にくらべると身體の容積の割合に、表面の面積が非常に多いのです。即ち皮膚の面積が目方の割合に廣いから、寒い時分には體溫を冷たい外界に奪ひ去られる事が大人よりも遙に著るしいです。然るに大人は自分一人で厚着をしたり、胸をかき合せたりするのに赤ん坊には全く之が出来ないばかりでなく、大人の身體は生理的にも體溫の調節

がよく出来るやうになつて居るのに反して赤ん坊にはこの調節が完全に行かぬ爲に、一層寒さに犯され易いのです。但しこの生理的の事は専門的になり過ぎますから説明を略します。それですから單に衣服に注意して風邪にかゝらぬやうにするばかりでなく、身體の中でも最も冷え易い手や足には特別の保温装置をせねばならぬ場合が多いのです。所が之によくコタツを使用する人があります。コタツを使うと木炭が燃える際に炭酸ガスがどうしても發生してよくないばかりでなく、これまであまり注意されなかつた一酸化炭素といふガスが發生して非常に有害な作用をします。此ガスは吸入されると血液のなかにある「ヘモグロビン」といふものと化合して「一酸化炭素ヘモグロビン」といふものになる爲に、血液の中になくてならぬ必要なもので、全身の細胞を養ふ爲に最も必要である「酸化ヘモグロビン」といふものを破壊して

しまひます。そして一旦この様になりますと、この回復は藥品の服用等では却々困難であつて、長い間貧血状態で居たり、發育を妨げられたりしますし、重い場合にはもちろん死亡しますから十分注意せねばなりません。このガスは木炭の燃えかけの青いほのほの中に澤山ありますから、若し木炭を使用するならば十分火がおこつて眞つ赤になつてから、コタツや火ばちへ入れる事にせねばなりません。それから又このガスはガス會社のガスの中にも百分中五乃至二十五位といふ多量な割合に入つて居りますから、ガスを不注意の爲に部屋の中へ漏れさせないやうに氣をつけるが肝腎です。殊に赤ん坊に就ては、コタツを入れた布團が顔の上へ覆ひかぶさる様にせぬ事が肝腎です。その爲に赤ん坊が布團の中で窒息して居た様な例が決して少くない事を申添へて置きます。それからなるべくならば、コタツを用ひずに電氣コタツ又は湯

たんぽを使用する事をお勧め致します。之ならば決して前の様な懸念はありません。併し湯たんぽに就て注意せねばならぬのは、昨今澤山用ひられる金屬製のもの等は非常に熱くなつて十分布片で包みましても直接手足に觸れると火傷を起し易いのですから、湯たんぽは必ず手や足を十分延ばしても尙五六寸位の所に置かねばなりません。温くしたいといふ親心からあまり近づけると却つて危険に陥る事を御承知願ひます。火傷は何でもな  
いものゝやうに考へる人が多いのですが、近い例では先日  
の濱尾樞相のやうに大人でも皮膚の三分の一以上が火傷すれば、如何なる處置をしても助からぬ位でありまして赤ん坊ではコタツの爲に僅かに足首丈けが火傷すれば如何なる處置をして助からぬ位でありまして赤ん坊ではコタツの爲に僅かに足首丈けが火傷で水ぶくれになつた程度で、數時間の中に死亡してしまふものが非常に多いのです

之は火傷の爲に一種の毒素が皮下に發生して、急性の中毒を起す爲であつて、如何なる名醫の手でも救済は出來ぬ位恐ろしいものである事をくり返して置きます。溫度に次で注意すべきは濕度です。寒中は非常に空氣は乾きますし室内の火鉢や暖爐は特に之を甚だしくしますその結果は氣管支カタル等の原因となります。滿洲の冬はその著明な例であつて、私が先年同地に奉職中の經驗によれば滿洲の子供でへんとうせんがひどくはれて居ないのはほとんど無い位でありましたが、之から見ても寒中室内の濕度を等閑に出來ぬ事がわかります。それは室内を暖爐や火鉢の類で温める場合には、その上に金だらひのやうな口の大きいものに水を入れて載せて置く事を忘れないやうにするのです。さうすれば火熱によつて水分が蒸發して室内に濕氣が多くなりますし濕氣が多くなればへんとうせんが肥大したり氣管支カタルを起したりする機會

が非常に少くなるのです。寒中に風邪のの多い事は主として以上の點に原因しますし、赤ん坊の風邪はしばしば肺炎を起して短時日の中に生命をも奪ふ場合が多いのですから昨日のやうな季節に御誕生の方々にはこの上の御注意が何よりも必要と信じます。

## ○赤らやんの誕生調べ

——一時間に約六人——

市が調べた最近十三年間のお目出度い統計  
市の統計課では東京の誕生統計といふ『お目出度い統計』を取つて統計課らしい前祝をした、その結果によると、最近の十三年に東京で産聲をあげた男の赤ん坊が二萬五千四百八十人、女が二萬四千九百五十七人、合計五萬四百三十七人の赤らやんが生れてゐて、市民の百人について二・六人

の子供が出來約十二組の夫婦の間に一人づつの赤ちやが生れるといふ、實に素晴らしいお目出度振りであつて、一日に割あてると百三十七・七人となり、一時間の間に約六人の赤ん坊が産聲をあげてゐるわけで一番澤山東京で赤ん坊が産れる月はお正月で昨年の正月は七千五百六十人生れ、次は三月、二月となりこの十一月は年中の第四位になつてゐて一年間の出産の約九分を占めてゐる。一番少いのは六月で二千六十三人である、尙全國的に見ると昨年の出産は百九十九萬八千五百二十人中百人中三・三七人の出産率になり、一日に五千四百六十人強一時間二百二十七人強の子供が生れてゐる。最近に全國で一番赤らやんが多く生れたのは大正九年でその後次第に出産が少くなつて來る許りでなく男の子が減る一方で、その上男子の死亡率が多くなるといふ、女生過剰の時代がいよいよ出現しさうな傾向を示して來た、大正九年十年に



赤ちやんが多いのは好景氣のため生活の安定を得て結婚する者の多かつたためで間もなく不景氣におそはれ年々結婚難に陥つて往く事を明確に數字が物語つてゐる。

○子供室理想だけでは失敗する

朝鮮金剛山鐵道の取締役山内伊平氏の目白台の家に立派に造られた理想的小子供のお部屋が今は書生部屋になつてゐる。これに就て操子夫人の失敗談がある。まだ幼稚園や尋常小學の下級である一男二女のお子さん達が、夫人の隣室へお友達をつれ込んで、毎日遊戯で大騒ぎをなさるので、少しも落ちついた氣分になれないので一案を立て、丁度邸宅が前に早稻田一帯を眺望した目白台の傾斜の地にあるので、その傾斜を利用して、お座敷からは地下室であるが、前方の眺望の實によい場所へ理想的小子供室を新築に及んで、この部屋の

前にはきれいな草花が四季咲きほこる立派なガーデンを造つたりしてお子供さん達がこの部屋で遊ぶやうにいろ／＼機嫌をとつて見たところ、お子供さん達は決してこの立派な新築のお部屋へ行かないで、相變らず操子夫人の隣室で騒ぎまはつてゐるので、たうとう夫人の方で敗北して、子供室が書生部屋になつてしまつたので、同夫人が感じたことは子供が大きくなれば親のそばから離れて自由に勉強しやうとするが、尋常小學一二年か幼稚園の小さい子供は、どうしても親のそばにゐなければ安心してゐられぬものである事を感じた。そして親のそばにゐることが小さい子供は一番力強く感じてゐることを實際に知ることが出来て理想は大きな失敗であつたから、小さい子供の教育は注意すべきだといふのである。

右は東京日日新聞に載せてゐた所の話であるが子供室についての面白い經驗であります。大人が

子供の生活をよく理解せぬ譯でもあるまいが、大人の都合から割り出して一切子供を律し子供室を大人の室からかけ離れたところに設けるのが普通であります。元來家庭は子供本位にあるべきものでせう。鳥の巢は卵を産み雛を育てる所でありませう。獸類の棲む所も實は哺乳の場所でありませう。人類に於ても家庭は育児の場所で家庭内は悉く子供室となるのが自然であるといふ位であります。それを考へると子供室を別に設けることさへ不合理なのに更に居室から離して子供室を置くな

どは至極不自然といはねばならぬ位であります。如何にも極端なやうですが今日の家庭はあまり大人の生活を本位として子供の生活を犠牲になすやうに分化してゐると思はれます。何とかもつと子供本位の家庭生活とならずとも、せめて家庭には子供が家庭に於て楽しく善良に成育する様に努めた生活でありたいと希ふのであります。子供の生活のため全然大人の生活を無視せよとは申しませんが今日の家庭生活が一切萬事大人本位の誤なることに少くとも覺醒したいと望むのであります

## 幼児を入園させて

### 母の一人

今年四月子供を附屬幼稚園に入れます際は醫者がかなり強硬に反對致しましたし親類の者等も餘

り賛成いたしませんでしたので、親として幾分躊躇もいたしましたしが、思ひ切つて願書を出しまし

た。幸ひ籤にも當り入園を許されましたので今日に到りました。

醫者や近親の者などの不賛成であつた理由は幼稚園では子供の要求して居ない固定した智識を授けやうとして年齢不相應に智識の發達を催進する爲に身體の發育上害がありはしないかと言ふ點に一致して居つたやうに思はれました。けれども此等の人々が格別の經驗や研究があつてと申すわけではありませんが、何時か前述のやうな觀念を幼稚園と連絡して持つやうになつたのでせう。そんな成り行きから入園後は子供の幼稚園の生活には餘程注意を拂つて居りますと同時に、同じ年頃の他の子供達にも自然注意するやうになりました結果、親類の子供達を集めて遊ばせて見たり、他の幼稚園を二回程來觀したり、自分の子供の幼稚園を何回となく見せて戴いたりいたしました。

入園前の私共の子供は四十歳近い女中と毎日遊

んで居りまして看護婦の附いて居ることも度々ありました。それで毎日の日課のやうに繪本を開いて讀んで聞かせてもらふことが唯一の樂しみのやうでした。毎月五六冊位の繪本は殆んど暗記してしまふやうな有様で、相當に庭もありますが戸外の散歩などは興味を持ってないやうでしたから、繪本の好きな不活潑な天性を持つた子供だと幾分斷定された形で居りました。それが入園以來すつかり變りましてブランコ、迂り臺、砂遊び、などと戸外の遊戯に非常に興味を持つやうになり毎朝幼稚園へ行くのを楽しみに早起するやうになりました。従つて半年後の昨今では身體は殆んど強壯と申す程に見受けられますし、容貌や態度が大さう快活に見えるやうになりました。幼稚園の運動場でも入園前とは別人のやうな活潑な遊び振りを致して居りますので、親の身に取つては限りない喜びを感じて居ります。入園前に醫者等が懸念致

しましたことが凡て杞憂であつたと思ひます。唯此の僅か半年間の幼稚園に就ての私の觀察では保育の方針など人に依つて随分意見を異にして居るやうにも考へられますが、どの幼稚園に居ります

子供でも私共の子供が幸福に日々を過して居りますやうに幸福でありたいものと祈つて居ります。入園以來の感謝と満足とを述べます序でに思つて居りますことを書き添へました。

## 子供の世界

水島 きゆり

一

マコちゃんのお母さんが、箆笥から着物を出さうとしましたが、マコちゃん所有の大型自動車が邪魔をしてゐるので、引出を引出すことが出来ません。

「マコちゃん、自動車をそつちへ持つていらつしやいな。」

マコちゃんはつい今しがた床の中から起出して来たばかりなので、むつつりして立つたまゝ動かうともしません。お母さんは一度も、「マコちゃん、自動車を子供部屋へ持つていらつしやいな。」

とおつしやいました。マコちゃんは聞えたのか、聞えないのか、だまりこくつてゐます。

「マコちゃん、お早う。」

と言つて、其處へ顔を出した私は、

「おや、マコちゃんの大型自動車ですね、どうしたんです、ゆふべ車庫へはいらなかつたんですか。」

かう言ふと、マコちゃんの顔一面に、うすく喜びの色が動き出しました。私は小首を少しかしげながら、

「こんな重い自動車は、マコちゃんにはとても持つていかれませんねえ。」と申しました。

マコちゃんは忽ち、うんと力を入れて自動車を持上げ、さもく重さうにエンヤラクくと運んでいきました。

私「マコちゃん、今日は此の自動車で誰が乗るんです、ポビー君（人形の名、腕を怪我して人形病院にはいり、一昨日退院した。）ですか。」

マコ「さう。ポビーは病院から歸つてまだ此の自

動車に一度も乗らないからね。」

私「ちや今日はポビー君のお祝に、皆を自動車で乗せて何かするんでせう。」

マコ「うん、今日はね旗行列するんだ。」

私「いゝねえ、赤ちやん達（マコちゃんの人形の總稱）は大喜びね。ほら、チビ君もマリーさんも南洋の土人も皆ニコくしてゐますよ。」

マコちゃんは歡呼の聲をあげて、二三度跳ねました。さつきからマコちゃんに朝御飯を食べさせようとして待つてゐるをばあさんが、茶の間から二言三言おつしやつたが、マコちゃんの耳にははいらならしい。

「マコちゃん、赤ちやん達が待つてますよ。早くお顔を洗つて、御飯をたべて。」

私の言葉が終らないうちに、「うん。」と元氣よく返辭をしたマコちゃんは、湯殿へ飛んで行つて、

「お母さん、顔を洗ふよ。」

マコちゃんは今五つです。私とマコちゃんとはお隣どうしで、二人は無二の親友です。

## 二

「ケンちゃん、御飯ですよ。」

お母さんが幾度お呼びになつても、ケンちゃんは兵隊あそびに夢中で、おもちやの兵隊さん達から離れようとはしません。

「いゝ兒だねえ、早くお出で。」

「おいしいものがあるよ、早く来てごらん。」

何とおつしやつても、ケンちゃんはふりむいても見ません。ケンちゃんのお姉さんが不意に、

「トラ、トラター、チテチテター。」

と聲をたて、

「ケンちゃん、ほら三聯隊でもお晝御飯ですよ。」

ケンちゃんともお晝でせう 喇叭がなりますよ。

トテトター、チテチテター。」

ケンちゃんはすぐさま止めて、すばやく膳に向

ひました。

こんな話を何かで讀んだ時、私はケンちゃんのお姉さんが好ましくて、心の底からほゝ笑の湧出るのを覺えました。

子供を喜びと輝きに満ちた「子供の世界」に活躍させることの出来る者は、單なるお母さんでもなく、單なる保母でもありません。唯其の親友となり得る者のみであります。

~~~~~

負ふた兒に教へ られて淺瀬る。



# 智慧くらべ

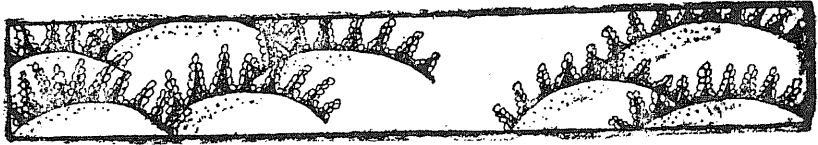
金子彦二郎

それは明麗といふ言葉がほんたうにふさはしい小春日のある日曜日の前でした。

瑠璃子さんは仲善しの紀伊子さんを誘つて、大好きな春田先生のお宅を尋ねました。明麗な空気を透して輝かしい太陽の光が部屋一ぱいに差し込む南向きの小座敷で、面白いお話を伺つたり、オルガンに合せて歌劇の軽やかな歌の一節を興じたりしてこの小半日は世界中の時計といふ時計が同盟罷業でもしてゐるかと思はれるほど、時間といふものゝ駆歩から遠ざかつてゐました。

## 二

春田先生は何時の間にか瑠璃子さんたちの爲に、二人の大好きなお鮎をとゝのへて下さいました。楽しい晝餉が、若い、優しい女の先生とかはいらしい二人の女生徒とでとりしたゝめられました。つねくから好物なお鮎が、この時はまた特別においしくて、舌の上で溶けていくやうにさへ思はれました。



おひるがすんでから、今度はランプが取出されました。先生がいつもお負けになるので、勝負がつく毎に二人はかはいらしい口からどつと歓聲をあげるのです。それにもだん／＼飽きて来たので、こんどは謎のかけつこを始めました。

「年をとるほど髪の毛の黒くなるものなアーに？」

と紀伊子さんがまつさきに題を出しました。

暫く小頭を傾けてゐた瑠璃子さんが、急に瞳をかゞやかして、

「それは筆でせう！」と答へました。

「その心は？」ニコ／＼しながら紀伊さんがいふと、

「もとは白いのが使へば使ふほど黒くなつていくぢやありませんか。」

「え、さう。」

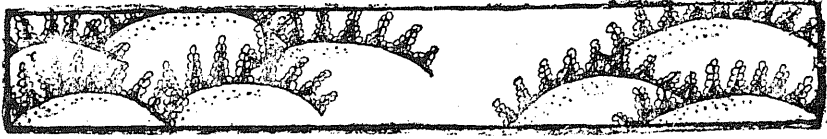
と紀伊子さんが快活にうなづきました。先生はだまつてニコ／＼笑つていらつしやいました。

今度は瑠璃子さんが題を出しました。

「下からあがるものなアーに？」

春田先生も紀伊子さんも、「これは！」といった風にちよつと目を丸くしました。さうして





額に小皺をよせて考へぶかさうに頸をふつたりしてゐました。沈黙が數分つゞきました。

「如何です？　おわかりになつて！」といったやうに微笑が絶えず瑠璃子さんの目もとから口もとから、先生と紀伊子さんのお顔へ放送されました。

これには先生も紀伊子さんも匙を投げて、たうとう

「わかりませんわ」といふ詠歎をこめた小さなうめきが二人の口から同時に洩れました。

「はで、申しませう。それはね、水の際に映つた藤の花……」

と言ひ終らないのに、先生と紀伊子さんの口から、

「まあー」

といふ呆れたやうな、物珍しいといつたやうな妙な感歎詞が飛び出しました。

瑠璃子さんの難問にすつかり弱らされた紀伊子さんは、先生におねだりするやうな口つきで、

「ねえ、先生。今度は瑠璃子さんの解かれないやうな問題を出して頂戴な。」といひました。

「え、さうね」

と軽くお答へになつた先生は、いつものやうに優しいほゝろみをたゝへながら、「少し待つていらつしやい。」と仰しやつて隣のお部屋へお入りになりました。



三

やがて先生は相變らずニコ／＼して出ていらつしやいました。さうして二人の前にお坐りになると、だまつて右の掌を二人の前にお出しになりました。二人がびつくりしてそこを見つめますと、そこには墨くろ／＼と平假名の「と」といふ字がかいてありました。

「お二人で、この掌にかいてある物を買つて来て下さいな。」  
と片ゑくばでおつしやいました。

「あら！」

「あら！」

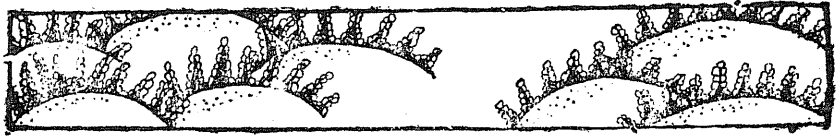
といふ驚きの聲が二人からをどり出しました。先生は二人の顔を見て聲を立て、お笑ひになつて、「さあ、お二人に、各二十錢づゝ差上げますから、どうぞこれをといつて又掌のひらをお示しになつて——買つて来て頂戴。」と仰しやいました。

數分の間三人は店屋のある町中を歩いてゐました。

四

ものゝ十五分も経つたかと思ふ頃まづ紀伊子さんが

「先生！ 只今。」



といつて入つて來ました。何を買つて來たのか懷をうんとふくらませてゐます。それから少し經つと瑠璃子さんが歸つて來ました。

「先生！只今」

といつてお挨拶がすんだ後で、身を起したところを見ると、これも大きな風呂敷包みをもつてゐます。

## 五

「どうも御苦勞様」

と優しくねぎらつて下さつた春田先生は相變らずニコ／＼なさりながら

「まづ紀伊子さんに伺ひませう。あなたは何を求めになつて？」

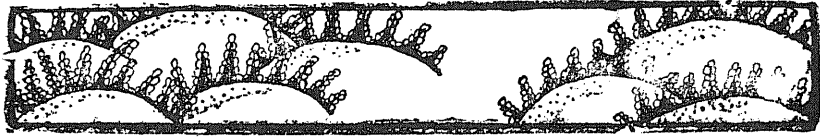
紀伊子さんは、

「先生！これ」

といつて懷から大きな物をつかみ出して前におきました。見ると大きなへちまでありました。

「おや／＼！」あちまあ！」

といつて先生と瑠璃子さんは笑ひこけました。やつと笑ひをおさへた先生は、まだをかさしさに咽るやうなお聲で、



「では瑠璃子さんのお買物は？」

とおつしやいました。瑠璃子さんは、おもむろに大きな包を開いて、大束な塵紙を一束どさりとお前に出しました。

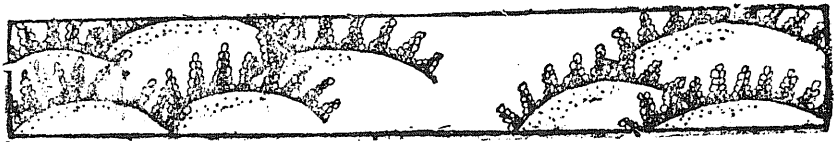
先生と紀伊子さんは、もうゐても立つてもをられないやうに笑つてくづれてしまひました。さうして再び平靜にたち歸つて、「一體そんな物をお求めになつたわけはどういふのですか？」

と質問のお言葉が先生のお口から出るまでには、「ホ、、、」「ヒヒ、、、」「フ、、、」といふ笑の劇が随分長く續いたのでした。

## 六

紀伊子さんがへちまを買つて來たのはかういふ譯でした。「と」といふ字から「いろは歌」を思ひ出して、「いろはにはへとちりぬるを……」とよんだり、「すせもひるしみ……」を逆に讀んだりしてゐるうちに、ふと思ひついたのは、「と」といふ字は「へ」と「ち」の間にあるといふことでした。それで、「へち間」を買つて來たのです。

瑠璃さんが塵紙を求めて來たわけにも面白いとはいへるのです。瑠璃子さんもやつぱりこの間春田先生からお習ひしたばかりの「いろは歌」を思ひ出したのです。さうして途



々口ずさんでゐるうちに、はたと思ひついたことは、「と」といふ字は「…とちりぬるを」といふやうに、「ちり」といふ字の上にあることでした。それで、これは名案と「ちりかみを」買つて來たのでした。

七

二人からこの買物のわけをお聞きになつた先生は、「お二人ともお見事〜。お二人はの智恵は紫式部と清少納言のやうに、何れ負け劣りはありません。勝負なしです。おえらい〜。」「さあこれから三人で欣びのダンスをませう。」と仰しやつてお立ちになりました。先生は「と」とかいた右掌を小旗のやうにおかざしになり、紀伊子さんはへちまを振りかざし、瑠璃子さんは塵紙を高く捧げて、南洋の野蠻人の歌かなんぞのやうな奇妙な節をつけて「いろはにはへとちりぬるを…。」と歌ひながら、足拍子面白く踊りつゞけました。

(一四、一二、七、)

人の親の心はやみにあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

中納言兼輔



長編 小説 『兼ちやん』

東京女子高等師範學校教授 岡田みづ

(一〇) 新しい帽子。

「今日は、私行くまいとおもふ。」とお芳は言った。「千代坊がそれア氣むづかしいから。可哀さうだけれど肝油をのませなくちやなるまい。お前さん昨夜あんな鮭なんぞ食べさせなければよかつたのに。」

「ウーン。爪の大きな位のぢやないか。」

「それでも、あの子はまだ鮭を食べる程におほきくなつてゐないからね。」

私なら坊やにあんなものを食べさせはしない。お前さんだつてもうすこし考へて、欲しがるものを何でもやらぬようにすればいゝに。今更仕様がなけれど。」

「ほんとにすまなかつたな。おら留守居をする。今日、別に行きたいとも思はないから。」

「そんな事はない。お前さん兼坊を連れて樂隊へ行つておいで。あの子に約束をおしななだから。」

「おまへ、あいつを連れてつてやれ。おら千代坊の世話するから。」



「馬鹿な！ 坊やが加減のわるいのは鮭のせいだときまつてる譯ぢやないんだから、そんなに氣を揉まなくつたつていゝよ。」

「鮭のせいぢやなからうか。」と吉藏は懸命に尋ねた。

「そうぢやないかも知れない。何しろ、私にやどうすれアいゝつてことが分つてゐるんだから、お前さん兼坊を連れて行つておいでよ……兼ちゃん顔を洗つたかい。」

「うん。」

「ぢやブラシをもつておいで。髪をよくして上げるから……じつとして立つておいでなチョツ！ この子は。そう頭を振り立てちやブラシがかゝらないぢやないか。……さ、よし。……手をお見せ。……これでお前洗つたの。」

「うん。」

「いつて、もう一度洗つておいで。そしてその紐をめて……私、一寸兼坊のこんたの帽子を出すから、千代坊を見てゐて下さい。」と言つて、お芳は押入へ首を突こんで箱を開けて、包みを取り出した。

「どんな帽子なんだ。」

「まあ、待つておいでよ。」と包み紙を解きながらお芳はにこゝした。店の人が之はアル



プス帽でごく上品なんだって言つたよ。兼坊の帽子は新調しなくちやならなくなつてゐるだらう。今のは他出用のにはすこしみすばらしいから、あれを平日用のにして、これを他用にしようとおもつて。そら！ 帽子つてこれさ。兼坊が「ヤア」ツていふだらう……坊や、来てごらん、お前の新しい帽子だよ。」

「子供のにしちや變な帽子だな。」と吉藏が批評した。大人のゝみたやうだ。全くだ、こいつは牧野のおやぢのによく似てらア……そらあの氣が狂つて新聞に何か書いて出した奴さマカルプ帽ツていふんだツて？ 兼坊、そのマカルプ帽を被つてごらん。」

言はれても、兼公は黙つてその帽子を熟視たぎりであたが、急に、

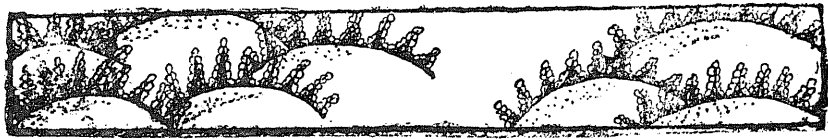
「あたゐ、そんなもの被らないや。」

「そらお前さん失策つたよ。」とお芳は鋭く小聲で夫をきめつけた。「お前さんが、つまらない事をいふから、この子がいやがるんだ……兼坊、お父ちゃんね、冗談をいつたんだよ。こない、帽子、被つて、 樂隊へ行くんだらう。」

「いやだ。」と兼ちゃんの後すさりして「あたゐ、いつもの帽子がいい。」

「だつて、この方がどんなにいか知れない。……ねお父ちゃん。」と母親は吉藏に目顔で知らせて、答を促した。





「あゝ、いゝ帽子だな。」と彼は曖昧に答へた。たゞそれだけちや申譯がないと思つたか、兼公に「さあ、坊、母ちやんの言ふようにしな。」

「いやだ！」と兼公はたゞ魯鈍に言つたのみだつた。

「いやだ？かぶらないかい？」とお芳は怒鳴つて「被らなけア、被らせてやる！」と兼公の腕をつかまへて頭に帽子をキユツと被せてしまつた。こんな侮辱を受けて、兼公は泣きさうになつたが、涙を拂ひのけて、ふくれつ面をして親達の前に突立つてゐた。

「お前こんなよい帽子を被つた事あるまい。」と母親は、得意満面で、眺めやつて「ね、お前さん。」と言つた。

「あゝ中々よい帽子だ。」と吉藏はねつから乗氣がしないで「だが、坊の頭に合ふのかな。」と訊ねた。

「合ふ？ 合ふどこちやない。坊の頭のために態々拵へたやうだ……お前かぶり工合がいゝだらう。」

「こいつ嫌ひだ、いつもの帽子がいゝや。」と子供は答へた。

「ちつきに馴れるよ。そんな上等のを被つてゐれば王様の前へ出たつて恥かしくない。……さ、お父ちやんと樂隊をきゝにいつておいで。そして、おとなしくするんだよ、お茶



の時にいゝもの上げるから。」

「さ、おいで」と父親は手を出した。「電車に乗つて行かうな。ひよつとすると、お父ちやんのかくしに何か入つてるものがあるかも知れないぜ。」

父子が出かけるのをお芳は愛想よく見送ると吉藏も見返つて笑顔をした。兼公は沈んだ様子をしてゐたが、その風變りの帽子には観念してしまつたらしかつた。電車に乗つてゐる間は二人ともいつもよりしんみりしてゐたが、樂隊が演奏をしてゐる公園へ着く頃には父親も悴の帽子をぬすみ視しなくなり子供も豆板に双の頬をふくらませて、平生の通りになつてゐた。

兼公は樂隊がドン／＼ブウ／＼陽氣にやる時は面白がつたが、指揮者が棒を緩く振つて樂器が休んだり靜かに微かになつたりすると、自烈つたがる風だつた。

喇叭が休んでゐた時、兼公は

「お父ちやん、あの人どうして喇叭を吹かないの。」と尋ねた。

「どうしてだかな。」

「あたい喇叭があれば吹くなア。一生懸命に吹くなア。」

吉藏が「さうだらうな。」と言ひかけると誰だか後ろの席で



「ちよいと、あれをごらんさい。なんてまあ馬鹿氣た帽子を子供に被せるンでせう。」  
「ほんとにネ。私やうちの子にいくらお金をやるからツて言はれてもあんなものを被せて戸外へは出しませんよ。」

といふのが聞えた。吉藏は耳がほてるやうな氣がし、思はずバイブの先を噛み碎きさうになつた。

「坊や、あつちの方へまはつて太鼓打つ人を見てこよう。」と言つても

「いやだ、あたゐ、あの人が喇叭を吹くとこ見るンだ。」と幸ひ今の言語をきかなかつたので兼公はそう答へた。

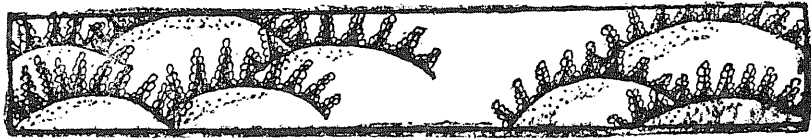
「世間には、上品ぶりがる人がありますね。」

「全くですよ。子供に人形見たやうな風をさせて嬉しがつてる親馬鹿はそれでよくても、子供が可哀さうですわネ。」

「坊や、」と吉藏は「お父ちゃんはその人が喇叭吹くまで待たないせ。あの人は招牌かんばんに持つてるだらう。お父ちゃんと一所においで。」

兼ちやんは不思議に思ひながら、父達に連れられていつた。

この時から吉藏はすつかり不愉快になつてしまつた。他の笑顔も、笑ひ聲も自分達が原



因になつてゐるやうな氣がしてならなかつた。樂隊の演奏が濟まないうちに二人は歸途に  
ついた。……父親は子供が恥かしい思ひをしはせぬか〜と怖ち恐れてゐたが果してその  
通りになつてしまつた。

電車の中で兼坊が元氣よく饒舌つてゐると酔拂ひが横目でじろじろ見ながらおめいの帽  
子素的なの知つてゐるけい。」ツていつた。兼公は小さくなつて父にかぢりついて、それから  
あとは黙りこんでしまつた。吉藏はお腹ん中が煮えくりかへりさうだつた。

往來を歩いて行く toward 向ふからやつて來た二人のちいさな男兒が兼公を見てにや〜笑つ  
て、行き過ぎてからワツ！ て大聲を揚げて笑つた。吉藏は兼公の手を、も一層堅く握つ  
たがそれでも黙つてゐた。

「こんだは若い聲で後から

「その帽子は誰の形見だい？」とわめいた。もう一人が

「にせ坊つちやん〜」

「何ていつても氣にするンぢやないよ。」と吉藏は小聲に囁いた。

「あたゐ、……氣にしやしない。」と震へながら兼公は答へた。

三人小娘が通りすぎたと思ふと、揃つてくす〜笑ひをして、その中の一人が「お祖母



さん！」と一聲あびせて、三人共一塊りになつて走つていつた。

もう家に近くなつから苦惱も結了おしまだらうと思つたら、そうは行かなかつた。通りの角で金子の初ちやんだのその他兼ちやんの遊び友達が數名現はれた。此子達はわる氣はないのだが兼ちやんの姿を稍暫く見てゐてやがてクス／＼笑ひながら逃出してしまつた。するとよその家の二階の窓から「ヤイ、氣取つた帽子の奴！」と囃して「てめいの足を見せろい！」と無禮な忠告をしたものがあつた。

「いそいで二人が共同の入口を入るとワツといふ聲がしてその中でも「上品ぶつて」といふ聲が情なくもはつきりきこえた。階段を登り吉藏は額から流れるひや汗を拭き、兼公はたまりかねて泣き出ました。

「いゝさ、いゝさ。」と父親は兼公がしやくり上げる肩を撫で、「もうこんな帽子を被らせないからな、どんな事したつてかぶらせねい。」

二人は室に入つた。

「大層早かつたね。」とお芳はにこやかに迎へた。

「あゝ、早くかへつて來た。」といふ夫の聲はふだんと違つてゐた。

「アテ！ どうしたの？ お前はなせ泣くの、兼ちやん。」



誰も無言。兼公は帽子を床に投りつけて、

「こんなもの被るもんか！　こんなもの被るもんか！　あたい坊ちやんなかになるもんか！　坊ちやん何かになるもんか！」と泣きいて、胸も張り裂けさうに嗚咽く家から駆け出てしまった。

「この帽子の畜生！」といつて吉藏は片足あげてそれを蹴とばし臺所の窓から戶外へとはね飛ばしてしまった。

お芳はうろたへて夫を熟視るばかり、千代坊は泣くより他の術を知らないので聲を張りあげて泣きたてた。

「お前さん、氣が狂つたの。」とやつとお芳が呼吸せわしく訊いた、

「狂ひさうなんだ。おい、お芳、あの帽子はな往來に捨て、おくんだぞ。兼公には帽子の事は一口もいふんぢやないぞ。まあ、きいてくれ！」といつて一伍一什を話した。

「だつて、あれは立派な帽子で、上品でね、値段だつて……」とお芳はきき終らぬうに言ひ出した

「いくら金を出したつていゝや。おら、兼公にマカルバ帽とやら何とやらいふものを被せるくらゐなら一週間分の給料を損した方がいゝ。おめへ。まあ他にいろんな悪口言はれて



もあいつが泣くまいと思つて我慢してゐる格好を見たら、……

「ちよいとお前さん、千代ちゃんを抱いて、おくれ。」とお芳は急にひ出した。「あの子どうしたか見てくる。……泣くんぢやないよ、千代ちゃん。……お前さん何とかしてだましておやりよ。」

お芳は數分間去つてゐたが困つた顔をして戻つて來た。

「あの子は見えないよ。お前さん見て來ておくれ。あの子はあたしに隠れてるのかも知れない。」と歎息した。

「そんな事はない。泣いてるところを見られたくないんだ。だから、おれだつて、すぐさつき、追かけて行かなかつたんだ。さ、行つて、探して來よう。それからナ、……お芳、帽子の事はぶつとりとも言ふんぢやないよ。仕舞つて置きたければおら拾つて來るから。」  
「何にも言はないよ。たゞい、帽子だし上品なのだから、もう誰か拾つてもつて行つたかも知れない。」

丁度その時兼公が入つて來た……すこし極りわるさうに、涙もよく拭かずに。しかし親達心配さうにしてゐるのを見て、待つてましたといふやうに、につこりした。

「お父ちゃん、あのネ……」



「母ちゃんどこへおいで。」と父親がいふ。

「いやな子だね。」と抱きしめながら母親がいふ。

「お父ちゃん、あのちいさな……」

「お茶の時に干ぶどうの入つたお菓子上げやうか。」と母親が訊いた。

「あゝ。」とにこ／＼して、それから、

「お父ちゃん、ちいさな犬が戸外そとにゐるよ。そして、あたいの帽子に噛みついて、めちや

ぐにしてるよ！」（一〇）了り

餌を運ぶ親の羽音には

目をあかぬ子も口をあくなり

二宮尊徳

嘆かるゝ身よりも嘆く老の身を

嘆きこそすれ嘆かるゝ身は

高野長英



# 告 稟

一、幼稚園及び小學校、家庭、育児、看護等に關する論說  
 調査研究等の寄稿を歓迎いたします。  
 一、寄稿は一行二十六字詰に記して下さい。但改行は一字  
 下げること。また句讀點は一字あけること。  
 一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び寄贈の新  
 刊書、交換雜誌、入會手續、更に  
 本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切  
 左記編輯兼發行所宛に願ひます。

## 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内 日本幼稚園協會

# 定 規 文 注

一、本誌購讀御希望の方は日本幼稚園協會に御加入下さい  
 居所、氏名を明記し會費前金にて東京女子高等師範學校  
 附屬幼稚園内日本幼稚園協會に御申込下さい。  
 一、日本幼稚園協會會員外にて本誌御注文の方は凡て前金  
 (郵税共)で願ひます。(郵券代用の場合には總て一割増)  
 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七  
 二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。  
 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特  
 に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。  
 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封  
 込に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御  
 送金を願ひます。  
 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひ  
 ます。

# 定 價

|         |        |      |
|---------|--------|------|
| 一ヶ月分一册  | 金參拾五錢  | 送料貳錢 |
| 半ヶ年分六册  | 金貳圓拾錢  | 送料   |
| 一ヶ年分拾貳册 | 金四圓貳拾錢 | 送料   |
| 共       |        |      |

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)

大正十五年一月十日 印刷  
 大正十五年一月十五日發行

幼兒の教育 第二十六卷 第一號

不 許 複 製  
 禁 轉 載

編輯兼 發行所  
 東京府豊多摩郡戸塚町大字戸塚五七五  
 堀 七 藏

印刷者 大杉直次郎  
 東京市牛込區山吹町一九八  
 印刷所 大杉印刷所

發行所 日本幼稚園協會

振替口座東京一七二六六番

# 廣 告

特等面一頁 金參拾圓 二面一頁 金貳拾圓  
 一等面一頁 金貳拾五圓 一頁以下御斷  
 神田區南甲賀町八品田奥松に御申込下さい

萬國幼稚園協會案

日本幼稚園協會譯

# 幼稚園保育要目

定價金壹圓五十錢

幼兒教育の實際家は本書によつて自家の教育案に参考指針を得べく幼兒教育研究家は本書によつて幼兒教育の新らしき考へ方を理解する助を得られることと信じます。購入御希望

の方は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會宛（振替口座東京一七二六六番）

前金（郵税不要）にて御申込下さい。



幼兒の最良運動具を提供します

此の運動具は理論家技術家實際家の最善  
を盡したる研究の結晶であります

1925年式

鐵製運動具

|          |         |
|----------|---------|
| 鐵製フランコ   | ¥ 65.00 |
| " 辻 臺    | ¥ 90.00 |
| " 遊 動 木  | ¥ 95.00 |
| " 廻轉シーソー | ¥ 70.00 |
| " 廻轉馬椅子  | ¥ 45.00 |
| " 廻轉スケート | ¥ 38.00 |



東京小石川区指ヶ谷町

ベレーフ

株式會社

電話小石川三六〇  
東京替換九六四

龍崎  
之園本  
印協幼

定價金三十五錢

大正十五年一月十二日印刷  
大正十五年一月十五日發行